



電子書籍の可能性

鼎談◆
岩本敏
[小学館]

植村八潮
[東京電機大学出版局]

沢辺均
[ポット出版]

何度目かの電子書籍元年といわれた二〇一〇年も終わり、「電子書籍」という言葉の物珍しさもなくなった二〇一二年。改めて、いま出版社が置かれている状況を捉え直す。出版社が電子書籍に取り組み意味はどこにあるのか？ 図書館への対応はどうする？

小学館社長室顧問・岩本敏、
東京電機大学出版局・植村八潮、
ポット出版・沢辺均の三人が語る、

電子書籍をめぐるあれこれ。

(この鼎談は2011年6月14日に収録し、
ポット出版Webサイトに公開したものです)

岩本敏●いわもとさとし

1947年生まれ。小学館社長室顧問。ネット・アドバンス取締役執行役員。小学館に入社後、『BE-PAL』、『サライ』、『Lapita』、『駱駝』などの編集長を務め、2008年定年により退職と同時に現職。



植村八潮●うえむらやしお

1956年生まれ。東京電機大学出版局長。日本書籍出版協会理事。著書に『電子出版の構図—実体のない書物の行方』(印刷学会出版部、2010年)、共著に『出版メディア入門』(日本評論社、2006年)など。



沢辺均●さわべきん

1956年生まれ。ポット出版代表。2000年、版元ドットコム(書籍データ発信の出版社団体)を立ち上げる。2003年からNPOげんきな図書館(公共図書館運営受託)理事。



いま、出版社が 電子書籍に取り組む意味

沢辺●岩本さんは、いま出版社が電子書籍に取り組む意味は、どのへんにあるとお考えでしょうか？

岩本●二つあって、一つは僕自身がここ一年ぐらい、コミックの電子版を営業も含め前線でやってきたなかで実感したのは、紙の本の売り上げが落ちていく一方で、デジタルコンテンツが支えてきたということ。これには前例があつて、電子辞書がそうでした。リファレンス系は、もうとつくに、デジタルのほうが紙の売り上げを上回ってるわけです。それは読者の利便性を考えてももつともなこと、核家族化が進んだ日本の家庭のなかで、二〇巻も三〇巻もあるような百科事典を置くスペースはない。日本の辞書文化は立派なコンテンツをたくさん生み出してきたんだけど、それをうまく使おうと思うと、紙ではもう無理。コミッ

クを見ると、紙がたとえ売れなくても、あるいは紙の文化を守るためにも、デジタルをやっておかなければ売り上げを維持することさえできない時代になってきている。

もう一つは、読者の側に、「電子（デジタル）なら買ってもいいよ」という人がいるんだつたら、それに応えるべき。この二つの点です。

前から沢辺さんと議論の的になってるんだけど、僕は、電子で書籍を読む人たちの数が増えてるほど多くないと思ってるんです。ITリテラシーの高い人たちがおもしろがってるだけで、本当の好きさが「デジタルでいいからたくさん本を持ち歩いて、どこでも本が読めるような状態にあつてほしい」という意識でデジタルの本を買ってることつて、そんなに多くないと思ってるの。いまは物めずらしくて、「ほらほら、こんなにして本が読めるんだよ」って人に自慢したい人とか、たまたまiPadやKindleを買った人たち

が、そこに入れるものがなきゃといって買っている。だから、巷間で言われているほど電子書籍に対するニーズが高いかっていうと、一般書籍に関してはまだそんなじゃないと思う。とくに文芸ものは、僕自身がデジタルでは読めないんですよ。ただ、新書だとか実用書、語学系の図書は、デジタルのほうが便利だと思ってる部分もあって、密かに愛用したりしてる。だけど、本当の意味での電子書籍の便利さをわかっている人は、読者のなかにまだそんなに多くはない気がする。

沢辺●岩本さんが、ぼくと議論の的になつてるとおっしゃった部分については、よくわからないと留保をつけてきたつもりだけど、いまは正に岩本さんのおっしゃったあたりと同じくらい感覚。ぼく自身は正直いって、電子書籍で読み通したのは一冊しかない。宮部みゆきの『おそろし』は短かったから読めた。村上龍と京極夏彦の電子書籍も買って、どちらも大ファンとまではいかないけど馴染

みのある著者なのに、読んでないの(笑)。毎晩寝る前に本を読む習慣があるけど、そのとき読むのは、相変わらず紙の本。Kindleは寝ながら読むには持ちづらい。重たくて、うまく掴めないしさ。そのへんは技術的に解消できると思うんだけど。

岩本●植村さんがよくおっしゃってるけど、調べもの、楽しみで読むものとは、明らかに電子書籍に向き不向きがある。調べるものは絶対電子のほうがいい。

植村●辞書や百科辞典などは明らかに電子のほうがいい。ただ、いまのところ、紙の本・紙の辞書・紙の百科辞典を作るプロセスは廃れてない。むしろ編集者の、信頼性のあるものを作りつづける手続きはまだまだ機能している。紙の百科とか辞書を電子にもしたら売れちゃった、という時代にいま移つてると思う。

次に来るのは、最初はひと通り読むけれど、あとで調べられればいいコンテンツ。日本人は、人文・社会学系の専門書は読まなくても、新書はすごく読むじゃ

ない？ 新書って、文芸と違ってほとんど知識。いわゆるビジネス書の中でも、ドロッカーやコトラー、マーケティング理論とか「経済学の基礎知識」となるものも多い。その手の本はかなり電子書籍向けの作りになると思う。そういった電子書籍が有効な分野が、あと五〜一〇年すると辞書に続いて立ち上がってくるだろうというのの一つ。

もう一つは、移行期において、紙の本が電子データとセットだと使いやすい領域があると思う。文芸は別にセットにしないでいいと思うし、辞書は電子だけでいいと思ってる。ただ、実用書の領域は両方揃うとすごく使いやすい。これは当面続くと思う。

レベニューシェアの本質とは

沢辺●AppleがiCloud [注1] っていうのを始めたよね。俺がおもしろいと思ったのは、CDで買った曲をどこでも聴くこ

とができるところ。たとえばボブ・ディランの“My Back Pages”のCDを自宅のMacでiTunesに取り込んだとする。

そうすると、Appleがあらかじめクラウド上に持っている“My Back Pages”のデータと、「沢辺はこれをCDで買っている」という記録を結びつけて、外出先のiPhoneからクラウド上のデータにアクセスできる、ということらしい。データは自分でクラウド上にアップロードする必要はなくて、自動でやってくれるんだ。詳しい仕組みはわからないけど、おもしろいと思う。

植村●話から外れてしまうけど、それはどういう仕組み？ CDをどこから買っても、コンテンツホルダー [注2] と契約す

注1●iCloud……Appleが提供するクラウドサービス。音楽や写真、文書などのファイルやメール、スケジュールのデータがiPhoneやPCなどのデバイス同士で自動的に同期される。

注2●コンテンツホルダー……音楽や映像、文章などの配信、販売をする権利を持つ個人や団体のこと。